The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第12回臨床哲学フォーラム　「キャロル・ギリガンとケアの倫理」の特集にあたって
Author(s)	小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 27-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100155
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集２　第12回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ「キャロル・ギリガンとケアの倫理」

第 12 回臨床哲学フォーラム「キャロル・ギリガンとケアの倫理」の特集にあたって

小西真理子

日時：2024年2月18日（日）13:00 ～ 18:00
場所：大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟41
開催方法：対面+Zoom
主催：大阪大学倫理学・臨床哲学研究室
共催：科学研究費JP23H00736

【企画案内】
　2023年9月に邦訳書、キャロル・ギリガン著『抵抗への参加 ── フェミニストのケアの倫理』（小西真理子、田中壮泰、小田切建太郎訳、晃洋書房）が刊行されました。出版を記念して、哲学・倫理学を専門とされる方々を中心にご登壇いただく、臨床哲学フォーラム「キャロル・ギリガンとケアの倫理」を開催いたします。

【プログラム】
第Ⅰ部『抵抗への参加』を読む
［パートⅠ：訳者編］13:00 ～ 14:00【司会：小西真理子】
趣旨説明、登壇者紹介、訳者解題：小西真理子（大阪大学）
「『抵抗を識別する』を読む」田中壮泰（立命館大学）
「『抵抗への参加』瞥見：疎外の視点から」小田切建太郎（熊本学園大学）
質疑応答

［パートⅡ：学生編］14:10 ～ 15:30【司会：堀江剛】
「来るべき春のために：『抵抗への参加』にみる「わたしたち」の連帯可能性」
吉田裕香（大阪大学）
「抵抗への参加：沖縄戦の聞き書きの現場からの応答」石川勇人（大阪大学）
「男性学におけるケアの倫理の受容について：『抵抗への参加』の検討から」
三原悠祐（大阪大学）
コメンテーター：小門穂（大阪大学）
質疑応答

第Ⅱ部　キャロル・ギリガンとケアの倫理　15:50 ～ 18:00【司会：ほんまなほ】
「〈苦しみの緩和〉から〈不正義への抵抗〉へ：ケアの倫理のラディカル化」
川本隆史（東京大学/東北大学）
「抹消されるフェミニズム：ギリガンのケアの倫理と人工妊娠中絶」
冨岡薫（慶應義塾大学）
「「結婚」と「反転図形」」品川哲彦（関西大学）
「ケアの市民的抵抗へ」柿本佳美（奈良女子大学）
全体討論

2024年2月18日（日）に第12回臨床哲学フォーラム「キャロル・ギリガンとケアの倫理」を開催しました。このフォーラムは、私が共訳者を務めたキャロル・ギリガンの著書 *Joining the Resistance*（2011）の翻訳書『抵抗への参加──フェミニストのケアの倫理』が2023年9月に出版されたことを記念して開催されたものです。『抵抗への参加』刊行記念イベントは他にも、出版社（晃洋書房）の方にご企画いただいたMARUZEN＆ジュンク堂書店の計二回のトークイベント（【梅田店】ゲスト：岡野八代さん、【池袋本店】ゲスト：小川公代さん）と、熊本学園大学小田切研究室の合評会イベント（登壇者：長友敬一さん、田中朋弘さん）が開催されました。臨床哲学フォーラムでは、訳者、大阪大学の学生、哲学・倫理学分野でケアの倫理について研究されてきた方々をお招きする形でイベントを開催いたしました。

第Ⅰ部「『抵抗への参加』を読む」［パートⅠ：訳者編］では、『抵抗への参加』共訳者による発表がありました。本フォーラムの企画者である私は、『抵抗への参加』に収録した「訳者あとがき」の内容を本書の解題として報告し、共訳者の田中壮泰さんと小田切建太郎さんに、それぞれ『抵抗への参加』を主題にした研究発表を行っていただきました。第I部［パートⅡ：学生編］では大阪大学の学部生・大学院生の吉田裕香さん、石川勇人さん、三原悠祐さんに、ご自身の研究テーマに引きつけながら『抵抗への参加』について論じた発表してをいただき、小門穂さんにそれぞれの発表へのコメントをいただきました。

第Ⅱ部「キャロル・ギリガンとケアの倫理」では、川本隆史さん、冨岡薫さん、品川哲彦さん、柿本佳美さんに、『抵抗への参加』に触れていただく形で「キャロル・ギリガンとケアの倫理」について論じていただきました。

さて、キャロル・ギリガンは私が卒業論文で主題にした研究者であり、私がこの業界で生きるきっかけを与えてくれた人です。私が卒業論文を書いていた当時は、「キャロル・ギリガン」も「ケアの倫理」もインターネットで検索してもほとんどヒットしないほど、日本での研究が根づいていませんでした。現在も「キャロル・ギリガン」を主題としたような学術イベントはほとんど聞いたことがありません。そんななかで「キャロル・ギリガンとケアの倫理」というテーマでフォーラムを開催できたことが、私の研究者人生におけるひとつのメモリアルになりました。第Ⅱ部にご登壇いただいた方々は、私がケアの倫理の研究をしてきたなかで、キーパーソンのような立場の方々です。川本さんはギリガンの著書を女子大学で講読されたご経験はもちろんのこと、

正義論をご専門にされていた系譜のなかでケアの倫理と出会われ、その意義を日本に根づかせてくださった方であり、ギリガンの新訳『もうひとつの声で』の訳者でもあります。冨岡さんは哲学・倫理学分野で特にギリガンに感銘を受ける形で研究活動を開始された方（私が知る限り、日本の哲学・倫理学分野においてギリガンが研究の起点にある方は、冨岡さんと私だけです）で、なおかつケアの倫理の研究活動を現在積極的に行なっている若手研究者で、私がぜひこの業界に居続けていただきたいと思っている方です。品川さんは哲学・倫理学分野においてケアの倫理研究を先導されてきた方であり、現在のケアブームとは若干異なる堅実な哲学的ケア倫理の視点をお持ちの方です。品川さんが関西の哲学・倫理学業界にいてくださったことは、私のキャリアにおいて大変心強いことでした。柿本さんはケアの倫理を授業で扱われていることはもちろんのこと、哲学・倫理学分野でフェミニストとしての抵抗を体現されてきた方です。私のはじめての学会発表の司会を務めてくださった方でもあります。哲学・倫理学業界は女性が極めて少ないです。そんななかで、柿本さんがねばり強くこの場にいつづけて下さっていたことに敬意を抱いています。このようなみなさまにご登壇いただけたことに心より感謝しております。第Ⅱ部のご発表のうち、本特集には冨岡さん、品川さん、柿本さんよりご寄稿いただきました。

フォーラムには多くの方がお越しくださり、キャロル・ギリガンとケアの倫理についてさまざまな観点からの議論がなされました。ケアの倫理がやっと多くの人びとによって語られる時代が到来しました。このように注目を集めるようになってきたときこそ、その原点が問い返され、これまでの営みの反省もともないながら、新たな場所への到達が願われるのではないでしょうか。私たちの社会には、抵抗への参加が求められていることがまだまだたくさんあります。ケアの倫理のあり方もひとつではなく、さまざまな立場からの広がりが求められると思います。今、若い人たちの声も参与する形で、ケアの倫理の議論への反省と発展が広がっていく未来に思いをはせます。

（こにし・まりこ）